

ぼくもみんなもひとりぼっち



大野町立南小学校三年

栗野 碧海

「ひとりぼっち」は、こわいし悲しいものだとはぼくは思います。それなのに、「すてきなひとりぼっち」だなんてなんでだろうとふしぎに思い、読んでみたくなりました。

この本は、一平くんという男の子が、お母さんをさがすために一歩ふみ出すことからはじまります。まわりのたくさんの人に助けられ、そのけいけんを通して大切な時間、心地よいひとりぼっちの時間をみつけるというお話です。

まずぼくは、一平くんはとてもゆう気があり、すごい男の子だと思いました。もし一平くんのように帰ってきてお母さんがいなかったら、ぼくはさがしには行けずひとりでお母さんが帰ってくるのをまっていたと思います。ぼくがさみしくまっていると、家の前の工事のおじさんが声をかけてくれるかもしれないし、近くの友だちのお母さんが来てくれるかもしれない。少しまてばお姉ちゃんも帰ってきてくれます。だからきつと、お母さんをさがしに行けなかったとしてもぼくも一平くんのようにいつの間にかひとりぼっちではなくなったと思います。それに学校に行けば先生や友だち、家にはお姉ちゃん、お母さんお父さんがいます。ひとりぼっちだと思ってもみんながいてくれるので、ぼくは安心できます。ぼくは知らない間にたくさんの人に助けられて、ひとりぼっちではなかったのかもしれない。

こわくて悲しいひとりぼっちだけでなく、ひとりぼっちにもいろいろなひとりぼっちがあるということをこの本は教えてくれました。ゲーム

をしたり、エレクトーンをひいたり、好きな本を読んだりする時間もひとりぼっちの時間で、楽しくわくわくするひとりぼっちはいいかもしれないと、ぼくは思いました。それにべん強したりなにかをがんばる時間、ゆつくりとなにかを考えるひとりぼっちの時間もひとつようだと思えました。そしてぼくだけでなく、みんなもそれぞれのひとりぼっちの時間をすごしているのだと気がつきました。

一平くんが「ひとりぼっちも悪くない」と自分の大切な時間をみつけたように、ぼくもそう思えるひとりの時間をたくさんさがしたいと思いました。それがみつかった時、きつとぼくは「すてきなひとりぼっち」になれると思います。もしひとりぼっちでさみしいと思っている子がいたら、ぼくはゆう気を出して声をかけてあげたいし、「すてきなひとりぼっち」があることも教えてあげたいです。ひとりだけひとりじゃないみんなとの時間も、ぼくひとりの時間も大切にすごしていきたいです。

『すてきなひとりぼっち』

なががわ ちひろ 作

のら書店

講評

「ひとりぼっち」という言葉はマイナスのイメージでとらえられがちですが、読書を通してその見方を大きく広げることができました。ひとりで過ごす時間をどう生かすか考えて大切に過ごすなかで、仲間ともつながっていけると気付けたことが素敵です。

題名 「神戸のかべ」は 大震災のかたりべ

春日小学校四年

小椋 風花



「突然、大地が大きくはげしく動いた!」

阪神・淡路大震災―私が生まれる十八年前に起きた大地震だ。地面がさけ、ビルが倒れ、家がつぶれてたくさんの人が亡くなった。あちこちから火がふき出し、街は火の海となり、まるで戦争でばくげきを受けたようにはかいされた。それなのに、どうして『神戸のかべ』は今もなお残っているのか、私は不思議に思った。

このかべは、市場の防火へきとして職人さんたちに丹精こめて建てられた鉄筋コンクリートのかべだ。市場が繁盛する様子を見守ってきたのだろう。第二次世界大戦のときに、このかべもぎせいになったが、しっかりとふんばり立ち続けた。それから、五十年たった今度は大地震にあったのだ。ところどころ、鉄骨がむき出しになりながらも激しい炎にたえて力強く立ち続けた。私は、戦争と大地震をくぐり抜け、ぼろぼろになっても立ち続けたかべは、将来を不安に思う人々の心の支えとなっていたのだと思った。

私は、夏休みに淡路島にある北淡路震災記念公園に行った。阪神・淡路大震災を起こした野島断層がある所だ。そこに『神戸のかべ』があった。実際に見てみると本当にぼろぼろのかべだった。しかし、無言だけでもそのかべには、たくさんの人達の思いが込められていると思った。職人さんに、平和でにぎやかな市場を願って頑丈に作られた防火へき。戦争や震災で亡くなった人の魂や、震災後にみんなで元気になるうとかべの周りにコスモスを植えたり、音楽を演奏したりして、かべに思いをた

くした人々の心とともに、『神戸のかべ』は、今も残り続けているのだ
 と思った。

私には、神戸に住んでいる親せきの人がいる。まさに阪神・淡路大震災を体験した人だ。私は、当時の様子を聞いた。すると、

「大震災が起きた時は、地面が割れ、家がつぶれ、電気も水もなく普通に生活することができなくなった。毎日が不安でいっぱいだった。道路がひんまがり、線路もぐにやぐにやになり、バスも電車も使えなかったけれど、生活に必要な道具や食料を多くの人から支援を受けることができた。家を貸してくれる人もいて本当にありがたかった。がんばって生きなくてはいけないと思ったよ。」と教えてもらった。私は、大きな恐怖と深い悲しみを乗り越えていく人と助け合っている人との強い温かい心のつながりに感動した。

私はこの本を読み、『神戸のかべ』は、震災の生き証人だ!地震の恐ろしさをみんなに伝えようとしているかたりべだ!と思った。東日本大震災をはじめ、今でも各地で大きな自然災害が起きている。私は、自然の恵みに感謝するとともに自然の恐ろしさも忘れてはいけないと思った。災害に対する備えをしっかりと行い、生命を守る強さと人を思いやるやさしさをずっと大切にしていきたいと思った。

『神戸のかべ』のものがたり
 上野 園代 作
 上野 園代

講評

阪神・淡路大震災を起こした野島断層を訪れ、地震の恐ろしさを知ると共に、「神戸のかべ」にも出会い、この本を通して様々な人の思いに出会うことができました。かべを今の時代まで残してきた意味や自然の恵みに感謝するだけでなく災害対応や、これからの生き方を新たに考えることができました。

きゅう食がもつとすきになった



揖斐川町立清水小学校三年 加勢 悠真

ぼくの自まんは、小学校に入學してからずっと、きゅう食をへらしたるのこしたりせずに全ぶ食べていることだ。すききらいがないわけではない。野菜はあまりすきではないし、とくにトマトは全く食べられない。でも、先生に

「のこったきゅう食を食べてくれる人いませんか。」と聞かれると、つい手をあげてしまう。

ぼくが一番すきなメニューはカレーだ。本の中ではカレーの日のきゅう食室の一日がしようかいされている。とても細かい作ぎようがたくさんあることにおどろいた。肉は新せんであるかや温どをはかること、玉ねぎをあめ色になるまでじっくりといためること、カレーのルウまで手作りされていること全ぶにびっくりした。ぼくのお母さんは、カレーは手ぬきをした日で作るとよく言っているので、きゅう食のカレーもかんとんに作っているものだと思いきんでいた。でも、こんなに時間をかけて作ってくれていることがよく分かった。だからおいしいのだ。ぼくの学校のきゅう食のカレーはきせつがかわれば、中に入っている野菜いもかわる。夏野菜のカレーは苦手なトマトが丸ごとごろっと入っているが、ふしぎとおいしく食べられる。きつとたくさんの調理いんさんのかけてくれた手間とあいじようが入っているからだと思つた。

テレビで言つていたが、アフリカでは大へんな食りようぶ足がおきているみたいだ。そのほんたいに日本では、たくさんの食べ物がすてられているとも言つていた。おなががすいてないている子どものえいぞうを

見ていると、日本ですてられている食べ物をとどけてあげたいけど、ぼくの力では何もできない。とてももどかしい気持ちでいっぱいになった。今のぼくにできることは、食べ物をむだにしないこと。今は小さいことかもしれないが、毎日のきゅう食をぜつたいにのこさずに食べることを心がけたい。

調理いんさんの大切な仕事の中に、新しいきゅう食のこん立てを考えることと書いてあつた。ぼくたちの学校では、町のとくさん品を使つたきゅう食や、毎月全国のきよう土りよう理が食べられる。毎日あきずにおいしく食べられるのも、調理いんさんのおかげ。ぼくたちのためにくふうをしてくれている調理いんさんはすごいなと思つた。ぼくの町のきゅう食センターははなれたところにあるので、調理いんさんに会うことはないけれど、のこさず食べるのが調理いんさんたちへのかんしゃの気持ちをつたえることにもなると思うから。

この本を読んで、ぼくたちが毎日食べるきゅう食はたくさんの人にまもられていると知つた。そして、今までよりもつときゅう食が好きになつた。そんなきゅう食を毎日食べられることに心からかんしゃをして、明日からも手をあわせて「いただきます。」と言いたい。

大塚 菜生 作

『給食室のいちにち』少年写真新聞社

講評

苦手な給食があつても調理員さんの手間と愛情を思つて食べる姿や調理員さんへの感謝の気持ちがよく分かる感想文です。食糧不足の問題から食べ物を無駄にせず自分にできることを考える姿がとても素敵です。悠真さんが残さず給食を食べる思いがよく分かりました。